THE CALL TO THE MINISTRY

BY

Norman F. Williamson

聖職への召命

エヌ・エフ・ウイリアムソン著

宮澤六郎譯

Christian Literature Society
教文館
GINZA, TOKYO, JAPAN.

聖職への召命

定價金十錢

出版部

聖職への召命

一　召命は神聖である

――神呼び給ふ。大祭司の職掌を語るに際して、ヘブル書の記者は言つてゐる。「神に召さるゝにあらずば、誰も自らこの貴き位を取るものなし、」(來五の四)と。それは、同様に聖職についても言はれやう。眞の牧師であつて、嘗て自己の事業を單なる選擇の事柄として始めたものはない。併し、彼の魂の奥底には、神が彼をその事業に召し給ふたといふ確信が存在する。人はたゞ單に自分が好きだからと言つてこの事業に當ることは出來ない。母の願や、父の熱望が、青年の傳道事業に就く充分な理由とはならない。人はたゞ單に生活の資を得る道として牧師になることは斷じて許されない。聖職につくといふ決心は、斯様な基

礎の上になされてはならない。

ソロモンが次のやうに言つた時、彼は人生のあらゆる微細な點に亘つて、萬人に書き送つたのである。「汝こゝろを盡してエホバに倚頼め、おのれの聰明に倚ることなかれ、汝すべての途にてエホバをみとめよ、さらばなんぢの途を直くし給ふべし」(箴三の五、六。)それ故確かに人は己の職業に關する重要な事柄に於いては、導きを求むべきである。醫師も、辯護士も、商人も、技手も、教師も、農夫も、ひとしく自己の職業への「導き」を受なければならない。而も、吾々は「醫業への召命」とは言はない。「法律への召命」とは言はない、然るに、「聖職への召命」と言ふのは普通である。この論文の筆者は「聖職への召命」を信ずるものであつて、召命に關する次の見解に同意するものである。「さて、私は人がキリスト教聖職を自己の天職として選擇するに先だち、彼は、その選擇は永遠の神によつて否應なしに强制せられ

たとの自信を有たなければならないといふことを、深い確信を以て主張する者である。永遠者の招きは、朝の鐘の響きが、農夫達を早朝の祈禱と讃美とに呼び集めつゝ、瑞西の谷々にひゞき渡る如くはつきりと、彼の靈魂の部屋々々に響き渡らなければならない。

聖職への候補者は、祕密の繩目にある人のやうに行動しなければならない。それは聖パウロの云つてゐる樣に「已むを得ざることである」(コリント後書九章十六節)彼の選擇は二つの何れでもよい選擇ではない。結局、彼は二つの間の選擇を有たない。他の一切の可能性は默してしまふ。そこには、たゞ、永遠の神の命令的召集としてひゞき渡る、唯一つのはつきりした召命があるのみである。」

二　召命は種々である、

人を聖職に召し給ふ神は同じ永遠の神であるが、彼は二人を全く同一の方法に於いては召し給はない。さうして又、人を聖職に召し

給ふ神は、天と地と、あらゆる世界を造り給ふた神であるが、しかも、召命は、必ずしも神祕的であつたり、「魔術的或は奇跡的」であることを要しない。普通は、單純な、當り前の方法を以て、神は自己の意志を知らしめ、人は自己を「神のこゝろによる使徒」であると悟るのである。神祕的な啓示や超自然的な訪問を待つてゐる者は、未だ、神の語り給ふ道を理解しない者である。「私はパウロとひとしく、福音を宣傳するために召を受けた」とスボルジョンは雄々しく斷言した。併し、彼にはダマスコ途上に於ける幻はなかつた。彼はたゞ單に、人間の最大の要求に關する確信、希望せる事業の牽引、及びそれを遂行するに適任なることを自覺してゐたに過ぎない。彼は、人生の事實に於いて、また彼自身の魂の能力と衝動とに於いて、神が召き給ふことを感じた、さうして、謙遜しながらも迅速に信仰の中に立ち上つて、應へた「我此處に在り、我を遣し給へ」と。

「合衆國の重だつた神學校では、毎週の略式の集會に於いて、互に神聖な祕密を打ち明け合ふのが、昔からの學生の習慣である。交る〳〵彼らは、自分が、クリスチヤンになつた事情、その教育を受けた模樣、自己を聖職に參加させるやうにした經驗などを語り合ふのである、例外なしに、その物語は恰も醫者の一團によつて語られる話のやうに超自然的なもの――自然や人心の普通の働に於ける奇蹟的干與としての古い觀念による超自然的なものを缺いてゐた。このことは、神が全然彼らの選擇に與かられなかつたといふことでもなければ、彼が自己の意志を明にせられなかつたといふことでもない。それは、たゞ單に、彼らの心に神は單純な普通な方法を以て、かく働き給ふたといふことを示すのである。」

ペテロとアンデレとの召命は、いかに單純で又、普通であつたことであらう？　主イエスはガラリヤの湖のほとりを歩んでゐられた時、ペテロとアンデレとが網に忙

がしくしてゐるのを見た。主が岸邊を歩きながら、砂上に碎くる波の音を聞かれた時、恐らく彼は、海上を見渡され、それの懷いてゐる無數の魚のことを思ひ出されたであらう。さうして彼の前に、彼は海に網を打ち入れ——出來るだけ多くの魚を獲ようと骨折つてゐる漁夫たちを見給ふたのである。疑もなく、彼らは仕事に熱中してゐて、その師が彼らに近づかれるまで見なかつたであらう。人生の日常茶飯事が、この師に、精神の世界に於ける大きな眞理を暗示した。恐らく、海の無數の魚は、神の國へと捕へらるゝを要した所の世の無數の人々を暗示したことであらう。さればこそ、主は兄弟達に言つた、「我に從ひ來れ、然らば汝を人を漁る者となさん」(太四の十九)と。さうして吾々にこの物語を傳へてゐる者は、彼らが直に網を捨てゝ、彼に從つたと言つてゐる。マタイの召命も同樣に、「單純であり常態であつた彼は、帳簿を記入ずみになし、すべての仕事を整理して、事務を執りつゝ——事務

所にゐた。彼は事業を獨立で經營し、他の何らの高い權威にも隷屬してゐなかつた何となれば主が彼に、「我に從ひきたれ」と言はれた時躊躇するところなく、マタイは立ち上つて、彼に從つたからである。然るに、パウロの召命は異つた種類のものであつた。こゝには、「天からの光」、「一つの聲」、「眼見えざること三日」、「飲食ひせざること三日」、さうして「アナニヤ」のことがある。併し、キリスト教史の十九世紀間に、パウロの如き召命はたゞ一つしか產み出されなかつた。ペテロの召命とパウロの召命とは、いかに召命が相互に異り得るものであるかを示してゐる。

舊約聖書のうちに記されてゐるところの、或る預言者の召命の事情が、如何に異つてゐるかを考へやう。アモスは預言者でも、預言者の子でもなかつた。併し、彼は一人の貧しい「牧者、桑の樹を作る者」として、靜かに自己の職業に從事してゐた。テコアの牧場に於いて、彼は、平靜の時を有ち人々の靈魂に話しかけるところ

の靜かな微かな聲をきくことが出來た。彼は、たゞ單に一個の賤しい牧者に過ぎなかつた。併し、彼はその國に起りつゝあつた如何がはしい事を耳にした。彼は、富放蕩、奢侈、冷酷、及び不正、を耳にした。彼がこれらの事に思ひ恥つてゐた時、彼の召命を聞いたのである。彼は最早その群を守つてゐることが出來なくなつた、何となれば「ヱホバ羊に從ふ所より我を取り、往きて我民イスラエルに預言せよとヱホバ我に宣うた」(廐七の十五)からである。アモスの生涯の事情はイザヤの生涯の事情と著しい對照をなしてゐる。アモスは貧しい牧者であつた、併し、「イザヤは王の伴侶であつた、彼は宮廷の教養ある常客であつた、彼は王宮の境内に住んでゐた。」イザヤの召令は、ウジヤ王の死と關聯して起つた。「ウジヤ王の死にたる年われ主を見たり。」イザヤは、ウジヤ王に大きな望をかけてゐた。彼の死は一大損失であつた。そこには國家の安寧に對する疑懼があつた。併し、王の代りに、預言者は主

の幻を見た、「われ高くあがれる御座に主の坐し給ふを見たり。」イザヤが王の死を悼んで居た時、彼は神の召命を聞いた。主が、「われ誰を遣さん、誰かわれらのために往くべきか、」と問ひ給ふた時、イザヤは言つた、「われこゝにあり、われを遣し給へ」と。さうして、主は言ひ給ふた、「往け！」（賽六の八以下）と。

扨て、エレミヤをして、彼自身の言葉を以て、その召命と任務とを語らしめよ、

「エホバの言葉我にのぞみて言ふ、我汝を腹につくらざりし先に汝をしり、汝が胎を出でざりし先に、汝を聖め汝を立てゝ萬國の預言者とせりと。我こたへけるは噫主エホバよ視よ我は幼少により語ることを知らず。エホバ我に言ひ給ひけるは、汝我は幼少と言ふ勿れ、すべて我汝を遣すところに往き、我汝に命ずる凡てのことを語るべし。なんぢ彼らの面を畏るゝ勿れ、そはわれ汝と偕にありて、汝を救ふべければなりとエホバ言ひ給へり。エホバ遂に其手をのべて我國につけ、エホバ我に言ひ

給ひけるは、視よわれ我言を汝の國にいれたり。視よ我今日汝を萬民の上と萬國の上に立て、汝をして或は拔き或は毀ち或は滅し或は覆し或は建て或は植へしめん」（耶一の四―一〇）と。

今まで吾々が考へて來たところの召命は、十九世紀若しくはそれ以上も昔に聞いたものである。これから記すところは第十九世紀若しくは第二十世紀に於いて聞いた召命である。一八八七年にミズリ州に、一人の青年醫師が居た。彼の父は危篤であつたのでこの青年醫師は彼を看護するために往つた。或る夜、彼の父の臨終の間際にこの青年醫師は、彼の能ふ限りをなし終り、今や病人に行はれてゐた苦闘に於いて、生か死か、何れが勝利者であるかと固唾を呑んで待つて居た。彼が斯樣に待つて居た時、彼は自已の屬する教派の機關紙を取り上げた、さうして、日本の大分に醫者の宜教師が要求せられてゐる箇所を讀んだ。彼が其の記事を讀んだ時、何者

かゞ彼に、行くべき人は彼の外にないとさゝやく樣に思はれた。彼は考へれば考へる程、自分が行かなければならないことを感じた　彼はその記事を妻に見せた。彼女も亦、自分らが行くべきことを感じた。三十九年の間この青年醫師とその妻とは、日本の宣教師として働いた。今では彼らは東京に住んでゐる、さうして、彼は基督教興文協會（現の教文館）の主幹をして居る、何となれば、醫者の宣教師はもう日本に於てはその必要がないからである。併し、この全三十九年の間彼らは、神が彼らを日本に招き給ふたことに滿足して居たのである。日本の熊本市には、癩病事業を以て國際的に有名な一人の英國婦人が住んで居る。彼女の父は、英國軍隊の一士官として印度及び支那に於いて勤務して居た。印度の幼少寡婦の事情は、この父に深い印象を與へた。それ故、その令孃は早くから且つ屢々、彼が印度の婦人の憐れな情態に就いて語るのを聞いた。未だ幼なかつた頃、彼女は、人生の運命が甚だ苛酷

であるところのこれらの婦人のために、働かうとして印度に行かうと決心した。併し、刈穫の主はこの若い婦人のために、他の計畫を有つて居給ふた。彼女は印度に行かうとする努力を繰返へしたが、道は常に閉されて居た。遂に、日本に行くべき道が彼女のために開かれた。彼女は日本に來ると間もなく、多くの癩病患者を見た癩病に對する日本語は、彼女が初めてそれを聞いた時、彼女に深刻な印象を與へた彼女が、癩病と言ふ語が「天刑」を意味すると知つた時、その語は彼女の心を燃え立たせた。彼女の熊本に於ける最初の一年が終るに先づて、或る日、彼女は癩病人にとつて神聖である本妙寺を訪づれた。それは多くの癩病人が、物乞し、祈禱し、禮拜するためにその寺へ赴くからであつた。彼女が其處を尋ねたのは此の時が初めてじあつた。それは、美くしい春の日のことであつた。この寺の長い參道には兩側に櫻が一列に植へられてゐた。さうして、これらの櫻は悉く滿開であつた。その

日は、國際日であつたので、人々は群をなしてこの寺に參詣してゐた。その日の美しさ、櫻花の愛らしさ、陽春の輝き、人目を惹く春時の「きもの」を着た人々の祭日氣分、これらの總ては容易に忘れ難い一幅の畫を作つた。その時突然、この婦人は生涯忘れることの出來ない一つの光景を見た。これらの美しい櫻の下は文字通りに癩病患者、――物乞ひをしてゐる――を以て埋められて居た。彼らの周圍の生命と美とは、たゞ、櫻樹の下の生ける屍の恐るべき光景を、いやが上にも强烈にするのみであつた。この日、この若い婦人は、彼女の生涯を日本の癩病患者のために捧ぐべき召命を聞いた。斯くて、彼女は癩病患者の病院と、癩病人の爲め一つの立派な教會を建てた。しかも、三十五年の間、日本の癩病人のために働けといふ彼女への神の召命に關して、彼女の心には何らの疑ひも起らなかつたのである。丁度九年前、合衆國の或る神學生が聖學生義勇大會に出席してゐた。この學生は聖學生、義勇兵

ではなかつた。彼は內地の牧師とならうとしてゐた。會議中の或る夜、プログラムによつて八ケ國の宣教師が演說した。この學生は內地で働かうとして居た爲め、これらの話に格別興味を感じなかつた。宣教師は交々その訴へをなした。併し、これらの訴へは一つ〳〵この學生の頭の上を通り過ぎてしまつた。それは彼はどのミツションの領域にも行くことを志してはゐなかつたからである。遂に、日本からの宣教師が次のやうな話をして、日本へ行くべき働き手に、かの地に於ける學生に主イエスのことを語る助をなすやうに訴へた。その話は次の如くであつた。東京の高等學校に一人の立派な青年がゐた。彼は人格、能力、健康を始め青年が人生に成功を獲得するに要する一切のものを、明かに有つてゐた。併し、彼はその胸奧に何者かを憧れてゐるのであつた。而も彼は彼の憧れてゐる者が何であるかを知らなかつた彼は佛教、儒教、神道を研究した、さうして印度哲學の或るものをも讀んだ。併し

これらのどれにも、彼はその胸にあつた飢餓を癒やして呉れるものも、人も、見出さなかつた。彼はその前途を望み見た時、未來は暗く且つ無氣味であつた。彼は生きることを欲しなかつた。或る日彼は華嚴の瀧に行つた、さうして其處でこの若い日本の學生は瀑布に投身して、その命を絕つた。その時その宣教師は、彼の地には彼の如く憂鬱となり、氣落し、自殺する多くの學生があると言つた。宣教師は更に語り續けた、若しあの青年が主イエスを己が友とし、救主として知つてゐさへしたならば、その將來は暗く、味氣ないものではなく、明るい、樂しいものであり、それで彼も生きんことを欲したであらう。さうして更に若しあの學生が唯一人の眞の神を知つて居さへしたら、その眞の神は日本の八百萬の神が滿すことの出來ない彼の心の飢渴を滿し得たであらうと。さうして宣教師のこのアメリカの學生大會に對する最後の訴へは、「諸君のうち日本の學生に、主イエスに就いて語らん爲めに、日本

へ行かんと欲する人はないか、」と言ふことであつた。

この訴へは上述の神學生の頭の上を通り過ぎなかつた。それは一筋に彼の胸に泌み込んだ。その夜彼は眞夜中を過ぎるまでまんぢりともしなかつた。それはその訴へが彼の耳に響いてゐたからである。彼は神が自分を日本へ赴くべく招いて居給ふのを感じた。思索、默想、祈禱の數日、數週はこの召命を逐ひ拂ふことが出來なかつた。さうして遂に、それは神の聖旨であると、充分に確信した時、彼は收獲の主に言つた、「我此處に在り、我を日本へ遣はし給へ！」と。さうして、この地に於ける奉仕の數年はたゞ、神が彼を日本の學生の間に働くべく招き給ふたと言ふ確信を深めるばかりであつた。

三　召命の重要なる事、

「預言者らは我が遣はさゞるに趨り、我告げざるに預言せり」(耶二三の二一)。此の節ははつきりと、昔の人々が神によつて召命せられ

ずに豫言者の事業に就いたことを示してゐる。併し聖書は、これらの僞預言者を非難した。神の代辯者たるに當つて、何人の音信も、若し彼が、神己を招き給ふた――己を遣し給ふた、といふことを自覺してゐなかつたなら、眞實の響を齎らすことは出來ない。之に反して、遣はされたと云ふ自覺は人の音信に生命と能力と、人を說服せしめる力を與へる。神が自己を聖職に招き給ふたといふことに、充分滿足し且つ之を確信してゐることは、人に自信と膽力とを與へる。それは彼に威嚴と、重みと、自己の事業に對する尊敬とを與へる。自己の魂の奥底に、神が自己を或る事業に招き給ふたといふ永久の確信を持つてゐることは、人をして失意、艱難、試練、困苦の日にもその義務に忠誠ならしめるものである。若しかのマルコと稱するヨハネがはつきりと、神が彼をその事業に招き給ふたといふ事實を自覺して居つたならば彼はあのやうには、エルサレムに歸らなかつたであらう。召命の自覺は誘惑が、そ

の事業を投げ出させんとして來る時にも、人をして自己の事業を固執せしめる。されば人が聖職に入る前に神からの召命を有つたことは甚だ緊要である。此處に於いて彼は、自己が神の使節であることを知り、自己の榮譽と責任とを自覺する、斯くして彼の事業はより高尚なより立派な素質を有つに至るのであらう。

Printed in Japan

昭和二年十二月一日印刷
昭和二年十二月四日發行

聖職への召命
定價金十錢

譯者　宮澤六郎

發行者　東京青山南町七丁目一番地
エス・エイチ・ツエンライト

印刷者　東京市京橋區瀧山町五番地
渡邊吉郎

印刷所　東京市京橋區瀧山町五番地
中心堂印刷部

發行所　東京市京橋區銀座四丁目一番地
教文館出版部

發賣所　東京市京橋區銀座四丁目一番地
東京青山南町七丁目一番地
京都市河原町通り丸太町上ル
教文館

不許複製

The Adjutant General War Dept.
Washington, D.C.

C L
S J